

全国カレッジフットパスフォーラム 2019 及び 歩く体験と地域文脈に関する実地研修実施報告

Report on the College Footpath Forum 2019 and the Fieldwork on Walking Experience and Local Context

道尾 淳子* 南波 秀幸** 大野 秋奈** 斎藤 百華*** 石井 虹乃華†
佐々木 輝弥*** 菅原 彩*** 須野 真由香*** 得能 碧†† 善財 結花††

Junko MICHIO, Hideyuki NANBA, Akina OHNO, Momoka SAITOH, Konoka ISHII, Teruya SASAKI, Aya SUGAWARA, Mayuka SUNO, Aoi TOKUNOH, Yuka ZENZAI

概要

本稿は、RING「歩く体験と地域文脈の継承・創造・発展に関する研究」研究グループの2019年度実地研修プログラムの実施報告である。①2019年11月16日～17日に滋賀県東近江市にて開催された「全国カレッジフットパスフォーラム2019」への参加と、②11月15日～18日に独自企画した歩く体験の実地研修である。①では3グループ6タイトルの活動発表、パネルディスカッション、九州・関西圏の他団体との交流、幹事校龍谷大学主催のフットパスを体験した。②では近江八幡市、大津市、大阪経済大学にて歩く環境の視察やヒアリングを行った。以上を通じて、本学における地域貢献、地域連携の歩くルート開発やイベント開催に向けての知見を得た。

1. はじめに

北方地域社会研究所 (RING) の研究テーマの一つである「歩く体験と地域文脈の継承・創造・発展に関する研究」の研究グループは、2017年度より「全国カレッジフットパスフォーラム」(以下「CFF」)の機会に併せて、グループ独自の実地研修プログラムを企画実施している。今年度は2019年11月15日(金)～18日(月)3泊4日の行程で、研究グループ代表で本稿筆頭者の道尾講師、事務局地域連携・広報課の職員2名、学生研究員7名の計10名が参加して実施した。

本稿は、当研修の概要及び実施結果について報告するものである。

2. 実地研修プログラム概要

2019年度実地研修の概要は以下の通りである。

(1) 実施期間

2019年11月15日(金)～18日(月)
尚、参加メンバーのうち4名は11月16日(土)の東近江市愛東 CFF より合流した。

(2) 全体行程 (図1)

11/15 金 新千歳空港集合→中部国際空港→近江八幡市(歩く体験①=ラ コリーナ近江八幡)→大津市泊
11/16 土 大津市(歩く体験②:三井寺と大津百町)→東近江市愛東(CFF参加・活動発表)→蒲生郡竜王町泊

11/17 日 蒲生郡竜王町→東近江市八日市/奥永源寺/愛東(CFF参加)→近江八幡市(歩く体験③:八幡山・「八幡山の景観を良くする会」ヒアリング)→大阪市城東区泊
11/18 月 大阪市(歩く体験④:大阪経済大学主催防災ウォーク『OSAKA5GO!WALK』ヒアリング)→関空→新千歳空港解散



図1. 全体行程 (Googlemap より作成)

(3) 研修主旨

- ① 「CFF2019」におけるRING歩く体験研究チームの活動発表、パネルディスカッション、幹事校フットパスイベントへの参加、参加他団体との交流。
- ② 滋賀県・大阪府の歩く体験事例への参加と実施環境の視察、ヒアリング調査。

* 北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科, 北方地域社会研究所

** 北海道科学大学事務局地域連携・広報課

*** 北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科4年

3. 全国カレッジフットパスフォーラム

3-1. 全国カレッジフットパスフォーラムとは

「CFF」は2016年度に本学を第一回開催地として創設され、会期中に立候補制や指名制で幹事校を決定し2019年度まで毎年開催されている。本学は日本フットパス協会の団体会員であり、協会設立趣旨にある「フットパスの考え方や活動を全国に広めるとともに、各地で行われているフットパス活動を支援・連携することにより、活力に満ちた地域社会を実現するため」に賛同し、この「CFF」をイギリス発祥の「フットパス (Foot-Path)」に学びを得た現代日本版のフットパス活動における、大学や高等学校主体の活動の共有機会として位置付けている。フットパス活動は『「森林や田園地帯、古い街並みなど、地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径【Path】」の整備を通じて、地域の魅力を地域自身が再発見・創造し、それをウォーキングを中心とした現地での体験・交流の中で来訪客に感じていただく、まさに今求められている地域・観光のあり方を体現している』と唱われる。

3-2. 当研究グループの研究姿勢

2018年より始動した本研究では、歩く体験や文化そのものを俯瞰して捉える時、フットパスの概念は類似する多種多様な要素の1カテゴリーに過ぎず、歩くこと自体は観光、健康、スポーツ、まちづくり、防災教育、信仰等の分野で、まち歩き、ガイドツアー、自然歩道、オルレ、エコツーリズム、登山、ロゲイニング、巡礼等、あらゆるアウトドアアクティビティに波及性をもって存在しているものとの認識を根拠にしている。したがって「CFF」における活動発表についても、そのことを前提として3グループ6タイトルの口頭発表を行った（1グループあたり15分の活動報告と3分の質疑応答）。以下が発表の内訳である。

G01 (斎藤・石井・道尾)

1. 「これまで3年間、北海道各地の地域の歩く活動に参加して」
2. 「ウォーキングに対する意識調査」



図2. 分科会 I-①

G02 (菅原・佐々木・道尾)

3. 「手稲山麓における自然歩道等の利用状況と手稲区ウォーキングルートの特徴」
4. 「+PIT プロジェクト 手稲歩く観光ルート創

造プロジェクト」



図3. 分科会 II-③

G03 (佐々木・須野・道尾)

5. 「円山・大倉山における歩育企画の考案とグラフィックデザインの制作」
6. 「円山・藻岩山における若年層向けの夜登山企画とデザインツールの提案」



図4. 分科会 I-⑥

フォーラムは開会挨拶（滋賀県琵琶湖環境部 石河康久氏、東近江市市民環境部 玉沖貞彦氏、龍谷大学里山学術研究センター 牛尾洋也氏）、谷口良一氏（マキノ自然観察倶楽部）の基調、講演（約60分間）、以上の分科会（約150分間）、全体会（約45分間）の構成であった。全体会では、各会場のコメンテーターによる総評、学生たちによるフットパスに関するパネルディスカッションが行われ、全国から集まった高校生、大学生により活発な意見交換が行われた（図5）。閉会式後は宿舎に移動して、参加団体の高等学校1校、大学7校による交流会が開催された。



図5. パネルディスカッション



図6. CFF2019 配布資料 (左)・集合写真 (右)

† 北海道科学大学未来デザイン学部人間社会学科4年

†† 北海道科学大学未来デザイン学部メディアデザイン学科3年

3-2. 東近江市フットパスへの参加

GFF2019の2日目は、幹事校龍谷大学（みらいの環境を支える龍谷プロジェクト）が企画に関わっている滋賀県東近江市内でのフットパス（エコツーリズム）に参加し、「八日市」「奥永源寺」「愛東」の3コースに分かれて、それぞれ参加者や現地の人たちと交流を深めた。

八日市では、同大が制作協力した『八日市てくてくマップ』をもとに、まちのシンボル「太郎坊宮（阿賀神社）」周辺を歩き、商店街のカフェで八日市ランチを食した（図7）。



図7. 八日市コースの様子

奥永源寺では、紅葉の山村景観の中を歩き、巻狩、木炭、葉書のタラヨウ、木馬（きんま）、木地師の里（筒井神社）にふれ、美しい河原や名水、郷土料理をいただいた（図8）。



図8. 奥永源寺コースの様子

愛東では、資源循環システム「菜の花エコプロジェクト」の施設見学と、一面の田園風景の中を歩き、果樹園のご厚意で旬の柿や梨を試食する等した。また民家で昼食をいただいた（図9）。



図9. 愛東コースの様子

4. 歩く体験研修

4-1. 歩く体験①：ラ コリーナ近江八幡

近江八幡市に2015年オープンした「ラ コリーナ近江八幡」は、滋賀県を中心に展開するたねやグループの株式会社たねや（和菓子製造販売）と株式会社クラブハリエ（洋菓子製造販売）のフラッグシップ店で、近江八幡市のシンボル・八幡山と水郷

の風景の中にある。広大な敷地を歩くガイドツアーに参加し、建築史家の藤森照信氏による全体計画のもと、従業員一人一人が「自然を愛し、自然に学び、人々が集う繋がり場」を作り続けていくという想い、ワクワクするような里山の環境づくりについてお話を伺った（図10）。



図10. ラ コリーナ近江八幡の様子

4-2. 歩く体験②：三井寺と大津百町

大津市にある大津百町は東海道と中山道の宿場町としての歴史を持つ。天台寺門宗の総本山である三井寺と大津百町の界隈を、公益社団法人びわ湖大津観光協会の古都大津観光ボランティアガイドの会の担当者と歩いた。これはいわゆる「まち歩き」である。端々に歴史文化が感じられる一方で、昨今の市内はアーケード商店街や伝統的な町家の衰退が問題視されている（図11）。2018年8月オープンの「商店街 HOTEL 講 大津百町」の取り組みも現地見学を通じて学び、2020年2月10日、本学にて開催した「第6回 RINC フォーラム」においても内容を共有した。



図11. 三井寺と大津百町の様子

4-3. 歩く体験③：八幡山・「八幡山の景観を良くする会」ヒアリング

近江八幡市の旧城下町にはその姿から別名「鶴翼山」と呼ばれる標高280メートルの八幡山が面している。1962年から観光ロープウェー（近江鉄道）が運行、2014年からNPO法人地域活性化支援センター企画「恋人の聖地プロジェクト」の「恋人の聖地サテライト」に選定と、札幌の藻岩山（標高531m）と位置付けが似ている。八幡山には縦走コースが整備されており、当日は「八幡山の景観を良くする会（八景会）」会員の東森氏らとともにその半分を体験した（図12）。市では2002年より定年退職者の社会参加と健康増進・自立を目的とした2年制の「男の料理教室」を開催し、毎年同窓生を輩出している。この人材を緩やかに受け止める団体として2006年結成の「近江八幡おや

じ連」があり、各期を横系、環境ボランティア系と趣味・親睦系の各種団体を縦系に、多面的な活動を継続させている。八景会もその一つであり、実際の活動をヒアリングしながら八幡山を歩き、本学拠点地域（札幌市・手稲区）の自然歩道・登山道の活用や保全活動の持続的な体制づくりの好例を学ぶことができた。



図 12. 八幡山視察の様子

4-4. 歩く体験④：大阪経済大学主催防災ウォーク『OSAKA5GO!WALK』ヒアリング

大阪府大阪市東淀川区に所在する大阪経済大学は2017年度より、防災ウォーク『OSAKA5GO!WALK～災害に強いまちづくりは健脚から～』という社会連携事業を行っている。外出先で帰宅困難者となった際に、20kmを目安に5時間歩ける健脚づくりと、普段のまちを防災という視点で見直し、まちの魅力を再発見することが目的とされている。企画立上げの人間科学部・若吉浩二教授（体育学/スポーツ科学/スポーツ科学/ウォーキング指導等）と広報課にヒアリングを申し入れ、事前に下記4つの質問項目を送付し当日に回答と事業概要の説明を得た（図13）。下記Aは回答の要約である。

1. 社会連携として、スポンサー企業等もあわせると大変大規模なイベントであると思います。この協力体制をつくる準備段階ではどのようなプロセスやきっかけがあったのですか。
- A. 若吉教授の前職びわこ成蹊スポーツ大学での『おごと温泉・びわ湖パノラマウォーク』や『02健歩手帳』等が前例にある、当区では震災を受け、健康と防災を結びつけるウォーキングとした。大学始動で行政や民間に協力を求め、予算の1/3は卒業生関連のスポンサーで成立している。年々参加規模は増している。
2. 在学生はどのような関わりがありますか。授業やゼミとしてでしょうか。
3. 在学生のモチベーションとして、地域を歩くということへの動機付けをどのように行なっ

ていますか。

- A. 立上げの学生らは、東日本大震災を機に被災地へ赴き、ボランティア活動の現場で、自分の足で丘まで走ることができ津波から助かったという声を聞いており、健脚の重要性を理解している。当日参加者としての学生数は期待できないが、地域住民を巻き込む事前のアイデア出しや、イベント運営のサポート役を行ってもらう等、既存の学生広報団体らに協力してもらっている。
4. 20km（チャレンジコース）参加者の当日の様子で印象に残ることはありますか。本学でも先日（+PITとして）、大学から地域のシンボルの山に登頂して下山するという総距離20km、高低差約1,000mの歩くチャレンジ企画を行なったばかりです。大学の定例企画にするにあたり運営上工夫されていることはありますか。
- A. コースは5km（制限時間2時間30分・定員300名）、10km（制限時間3時間30分・定員300名）、20km（制限時間6時間・定員400名）を設定している。学生にとっては強行遠足（強歩大会）をイメージしてもらえば、過去の経験からも距離感として問題ないと思う。

今回のヒアリングを通じて、都市型大学として地域の防災活動と健康づくりへの寄与、学生の防災教育を目的とした大学・行政・地域・企業の連携プロジェクトの実態を知ることができた。今後、本学における学生ら若年層の運動機会と大学拠点エリアの地域交流機会の創出に向けて、地域連携の歩くルート開発やイベント開催を本格的に始動させ、総合的な地域貢献へと繋げていきたい。



図 13. 大阪経済大学ヒアリングの様子

5. まとめ

以上については、2020年2月14日（金）13:30～14:45、本学にて研修報告会を行なった。当研修内容を知見に、次年度も歩く文化研究と手稲エリアにおける地域資源をいかした実践的なブランディングを継続して行なっていきたい。